

## ◆古田織部念持仏 天神坐像 (推定鎌倉初期)

慶長二十年、五月一日、織部の念持仏、天神像が密かに届く。以後平成の今日まで人目に触れることなく瑠須庵客仏となる。久野治著「古田織部のすべて (鳥影社)」の中に、「織部文様の中で『梅花文』が異常なまでに使用されているのは、天神さまと崇める菅原道真の存在であろう ～中略～ 現在の興正寺は京都、水火の地と呼ばれ、古くは大伽藍、安居院の古跡で寺の門前には水火天神社が興正寺建立以前からあり、水火の地名は天神社の祭神、菅原道真の神霊が水火となって大雨を降らしたという伝説から発生した」とある。

隠れ切支丹の信徒は水火の地を逆さに読む。「火水 (かみ) の地」と。聖像は伏見の土人形で天神を誂え、天神即ち「天の神→デウス」と変化するのだ。天神と言えば菅原道真、菅原道真と言えば天神を連想するが、故に発覚することなく、より安全を勝ち取ることが出来る。菅原道真の強靱なる個性の賜物と言えるが、信徒は天神社の御札ではなく、大量生産の天神土人形を求めた。

隠れ切支丹達は、その都度、何処でも誰でも目にすることの出来る物を聖像に替えていた。聖母マリアなら観音を、イエスと十二使徒なら釈迦を中心とした十三仏となる訳だ。しかし、古田織部の念持仏としての天神像は、抜きん出て古かった。十二世紀後半～十三世紀初頭の製作様式を持つ。しかも梅の木で作られた霊木像なのだ。像は寄木造りであるが異様な木を用いられている。霊木像に用いられる木は、節があろうが朽ちて洞があろうが構わない。例えそれが造像に不向きな木材であっても関係なく使用される。それはその木でなくてはならない理由があるのだ。それが霊木像なのである(霊木で仏像を彫る場合は「霊木仏」となる)。限られた材料故に、寄木の異様さも納得出来る。菅原道真が詠んだ歌に「東風 (こち) 吹かば にほい起こせよ 梅の花…」があるように、菅原道真所縁の梅の霊木により、この天神像は彫られているのである。

天神像の背面、丁度腰のあたりに、織部によって十字架が刻まれているが、近年までその上には美濃和紙が貼られ隠されていた。御像は半跏踏み下げ岩座に坐すが、瑠須庵では岩座ではなく天拝山と呼称する。北野天神縁起、承久本巻の五に、天拝山の山頂で天道に祈る道真の姿が描かれている。「日本絵巻大成二十一北野天神縁起 (中央公論社 小松茂美著)」や「別冊太陽 天神伝説」等による詞書によれば、

「菅丞相は現身 (うつせみ) に 七日七夜天に仰ぎて 身を砕き心を尽くして あな恐ろし  
天満自在天神とぞ成らせ給ひける」

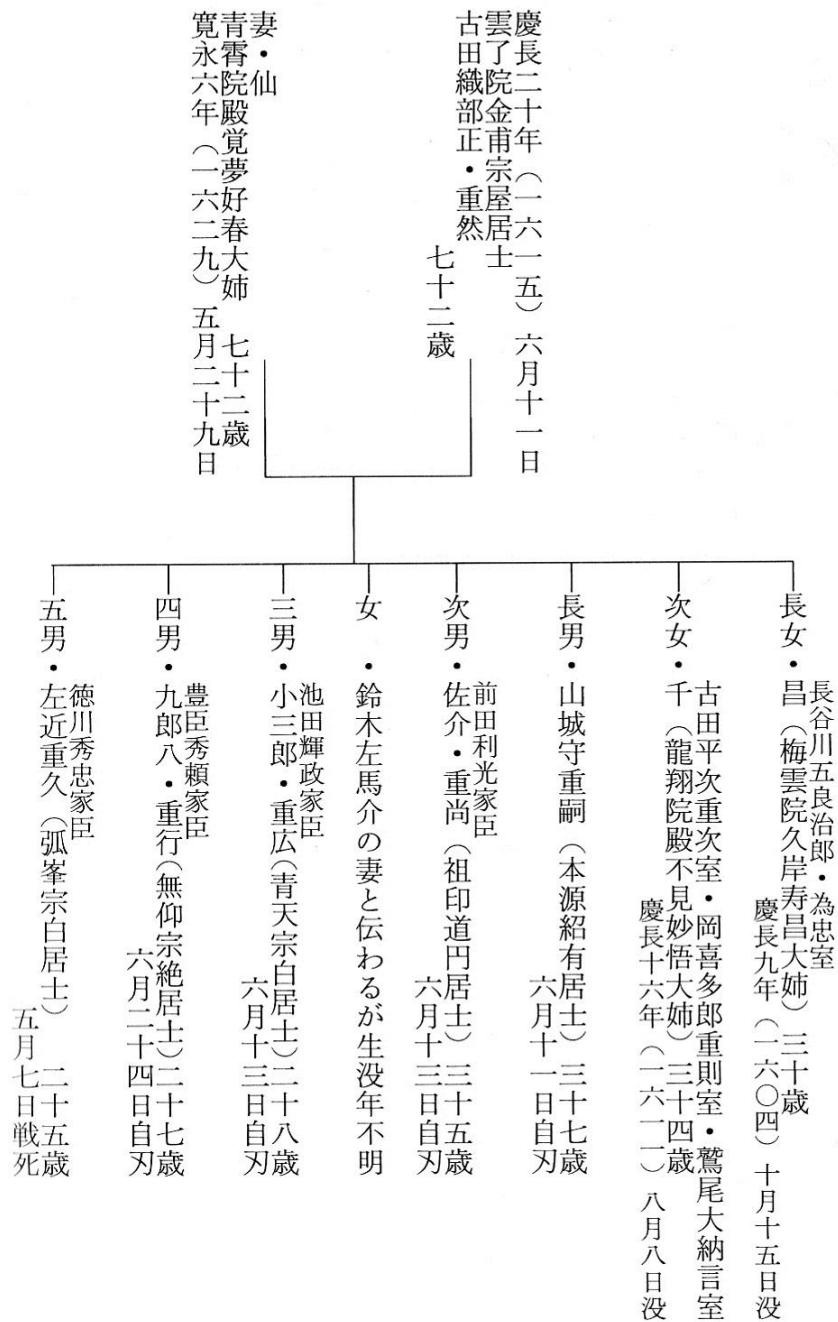
とある。死してなお怨霊神として復活したのが菅原道真であり、その荒ぶる御霊が入って居るのが天神像である。

通常、ある神として造られ祀られた像を、別の神として祀る場合、元々の像に込められた御霊を抜かなければならない。仏教で言えば天台宗や真言宗などで行う「生(しょう)を抜く」という行為であり、神道では「御霊送り」や「御霊鎮め」などと呼ばれるものである。天神像をデウス神として祀る場合も手順は同じである。

ここで問題なのは、古田織部はそんな荒ぶる天神像の御霊を、どうやって抜いたかということだ。しかも天神像に用いられたのは梅の霊木、真に尋常ではない代物なのだ。背面に十字架を刻むと云う事は、その時点で神霊が抜けたと解釈せねば出来る事では無い。だがそれは抜けてはいなかった。

相手は怨霊神菅原道真である。例え神官や高僧が御霊送りをしたところで動くことは無い。かくて織部の夢枕に立ち「無礼である」の一言霊を浴びせられ、凄まじき勢いで衰運となり、後に瑠須庵に預けられたが時既に遅く、家康の命により織部と長男の重嗣は切腹を言い渡された。織部は怨霊神菅原道真の御霊の怒りを買ったことを、分かり過ぎる程分かっていたが、最早どうにもすることも出来なかった。

「古田織部の世界（鳥影社 久野治著）」には織部は「かくなる上は入組難き故、さしたる申し開きもなし」と一言の弁解もなく我がこと終わる、とあった。なお本稿は、古田織部の研究家、久野治氏の数々の名著を決して誹謗するものではございません。織部切腹とその一族断絶の真相は、古来より決して解けることのない謎であります。謎は謎のままがよろしいかと…。同著に織部一族の没年と年齢が書かれているので引用する。



かくて織部一族はここに断絶。故に瑠須庵では、天の神デウス像とはせずに、菅原道真像として今日に至るまで祀っている。なお天神像の祭日は毎年二月二十五日と、織部所縁の六月十一としております。